

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	カントの自己触発論における注意と捨象 〈研究論文〉
Author(s)	嶋崎, 太一
Citation	HABITUS , 18 : 145 - 160
Issue Date	2014-03-20
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/39027">10.15027/39027</a>
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039027">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039027</a>
Right	
Relation	



# カントの自己触発論における注意と捨象

嶋 崎 太 一

(広島大学大学院博士課程後期)

## はじめに

私には、内的感官が我々自身によって触発されるということが、どうしてそんなに困難なのか、分からない。注意(Aufmerksamkeit)という作用は我々にこの点についての実例を与えることができる。悟性は注意という作用においてはいつでも内的感官を、悟性が思考する結合にかなって規定して、悟性の総合における多様なものに対応する内的直観たらしめるのである。(B156f.)

『純粋理性批判』第二版において自己触発が語られる箇所<sup>1</sup>に付された原注である。カントによるならば、内的感官における多様なものの結合は「悟性が内的感官を触発することによって」(B155)産み出される。この引用は、「我々が自らを我々が内的に触発されるとおりにしか直観しない」(B153)というように、我々自身が自らに対して受動的であることが「矛盾」であるかのように思われるという、「内的感官のパラドクス」に対するカントの応答である。すなわち、『純粋理性批判』第二版の演繹論において所謂「内的感官のパラドクス」が提示されているものの、実際にはそれは全く困難な問題ではないという。カントの説明によるならば、このパラドクスは、内的感官と統覚とが同一視されることに原因をもつ。内的感官と統覚の区別は『純粋理性批判』における統覚の概念の基礎をなすものであり、そのこと自体をここで問題として取り上げようとは思わない。しかし、「注意」とは何を意味しているのか。

カントの自己触発論は、『純粋理性批判』において特に本格的に展開されているわけではないにもかかわらず、近年になって多くの研究者の注目を集めている<sup>1)</sup>。しかし、カントが「注意」という作用に例を求めている点については、あまり触れられることがなかった。それは、『純粋理性批判』において「注意」という作用に対する説明がこれ以外になされていない点に原因があるだろう。それに対して本稿は、「注意」に注目してカントの自己触発論の特質と意義を明らかにしようとするものである<sup>2)</sup>。

## 1. 先行研究の検討

自己触発が外的触発と同等に並置されるべきものでないことは、既に多くの論者が指摘している。ペイトンによれば「外的対象による触発は我々に直観の質料を与えるが、それに対して我々自身による触発は、新たな質料を与えることはなく、単に時間という形式の下で所与の質料を結合している」<sup>3)</sup>。このペイトンの指摘から言えることは二つある。一つは、自己触発においては認識の質料が与えられるわけではないという点、そしてもう一つは、自己触発は外的触発によって質料があたえられて初めて成立しようという点である。ケラーはこの外的触発と自己触発の非同等性という、よく指摘される問題点を、自己触発がある種の「解釈(interpretation)」であるという点から説明している。「外的触発は、いまだ解釈されていない(未規定的な)現象としての情報の源泉のために想定され、自己触発はこうした諸現象を解釈すること(規定すること)にかかわっている」<sup>4)</sup>。勿論、外的認識において客観の規定は行われている。ケラーは外的認識における規定を与えられた特定の情報の解釈(言わば一次的解釈)であるのに対して、自己触発における規定は、この一次的な解釈による我々の信念内容の解釈(言わば二次的解釈)である。「自己解釈は、我々の外なるものについての解釈に依存している」。自己解釈とは、時間的な規定である。ケラー

は自己触発について、「二次的秩序(second order)」における「様々な今(nows)の連結過程」として描かれるものであると言う。

確かに自己触発においては、外的触発において与えられるような質料が与えられるのではない。そのことは、自己触発によって「結合を産み出す」(B155)とカントが語っていることから分かる。だが、「注意」というカントが度々挙げている事例がどこに位置付けられるのかが不明確である。「自己解釈」において、何が何のために注意されるというのか。悟性の自発性によって一次的解釈の所産が再解釈されると言えばよい話のようにも思われる。

メルニックは、自己触発によって「注意」されているのは「知覚している自己の諸状態」であると言う<sup>5)</sup>。つまり、「いかにして人が事物を見、あるいは聞いているのか」といったことに注意するのが自己触発なのだともメルニックは考える。メルニックの議論がケラーと異なっている点は、自己触発の焦点を「知覚されたもの」すなわち外的触発による諸表象に向けるのではなく、あくまで主観が「知覚していること」に向けているということである。だが、こうなると、「知覚されたもの」はどこで時間的に位置づけられるのかが説明されえない。つまり、知覚している主観の状態だけが問題である限り、知覚されている多様なものを時間的に秩序づけることができるのはいかにしてか、という問題が残る。また、「知覚している自己」に注意することとは、自己を実体化してとらえることにつながらないだろうか。

アリスンは、「注意〔に言及すること〕の本当の意義は、自己触発という、ともすれば不可思議な観念を理解可能にすることに向けられているのではなくて、むしろ、内的経験の直観のために要求される自己触発の一種を示しているということである」<sup>6)</sup>と述べて、注意が自己触発の概念を分かりやすくするために挙げられた例ではない、という見解を提出している。むしろ注意とは自己触発の「一種」なのだと言う。こうした見解は、『純粹理性批判』には自己触

発ということで二通りの異なる意味が表されているという彼の解釈を前提して立てられたものである。アリスンによれば、自己触発には、全経験の超越論的条件をなすものと、内的経験の特殊条件をなすものとで二種類の自己触発が『純粹理性批判』において展開されているという。アリスンは、カントが感性に対する悟性の「第一の適用」(B152)という表現を用いている箇所に注目し、これとの対比で「第二の適用」が(明言されないまでも)暗示されていると考えることで、「第一の適用」を全経験の条件としての自己触発に、「第二の適用」を内的経験の条件としての自己触発に対応させているのである。そして、注意作用において、主観は(外的な諸表象を)内的感官にいて対象として再構成するとアリスンは読み込む。だから、注意作用とは「内的経験を構成するものである」<sup>7)</sup>と言われることになるのだ。

とはいえ、自己触発を全経験の条件とすることにはやはり問題が残るだろう。というのは、自己触発がなければ外的経験もまた可能ではないということになると、カントの叙述(vgl. B156)に示されるような外的経験と内的経験の類比関係が瓦解することになるからである。そもそも外的経験も含めた全経験の条件として自己触発を要求するような叙述をカント自身はしていないように思われる<sup>8)</sup>。自己触発はあくまで内的経験に限定されるのではなかろうか。アリスンのように、「第一の適用」から類推して「第二の適用」なるものを想定しうるとしても、それを自己触発の一種とすべき必然性はなく、恣意的な感をぬぐいきれない。

## 2. 自己触発の様々な名称

自己触発(Selbstaffektion)という術語そのものは『純粹理性批判』には見出されない。他方で、第二版演繹論では、内的感官の触発には幾つかの名称が与えられている。逆に言えば、「自己触発」という言葉にとらわれすぎると、カ

ントの自己触発論の全貌が見えてこない。内的感官が触発されるとは言っても、実際には、「触発」という語を伴わない多くの表現が採用されている。まずそれを整理しておこう。

- ①構想力の超越論的総合
- ②図示的総合(Synthesis speciosa)<sup>9)</sup>
- ③主観の行為<sup>10)</sup>としての運動
- ④空間の記述としての運動

このうち、①と②は密接に関連する。また、④は③の言い換えである。このように、自己触発において「触発する(*affizieren*)」という受容的な表現は必要とされておらず、むしろ、「総合」であり「運動」であるという点の方が重要である。

まずは、①と②について検討しよう。①と②を自己触発との関係の中で論じる上で、テキスト上の大きな転換となっているのが、演繹論第24節の途中にある区切れである。第24節前半部分においてカントは、「総合」を知性的総合(*Synthesis intellectualis*)と図示的総合とに分け、前者を「あらゆる構想力なしで単に悟性によってなされる」(B152)総合であるとし、後者を「カテゴリーにかなって諸直観を総合する構想力の働き」(*ibid.*)であるとしている。だから、構想力の「自発性の一つの行使」(B151)としての図示的総合は「構想力の超越論的総合」と呼ばれるのである。この構想力の超越論的総合が、続く後半部分になって、自己触発の理論と結び付けられて新たな展開を見せることになるのだ。

内的感官のパラドクスを説明する場所として位置づけられている(*vgl.* B152)後半部分では、「我々は自らを我々が内的に触発されるとおりにしか直観しない」(B153)ことが論究される。カントはここで次のように述べている。

悟性は、構想力の超越論的総合という名の下で、その能力が悟性に他ならないような受動的・主観へと作用を及ぼすが、それは、我々が正当にも、内的感官がそれによって触発されると言いうるような作用である。(B153f.)

この少しあとでカントは「規定された直観は、私が図示的総合と名付けておいた構想力の超越論的な働きによって、内的感官が規定されることの意識(悟性が内的感官へと及ぼす総合的影響)を通じてのみ、可能である」(B154)と説明しているが、これも自己触発を示す表現とみてよいだろう。

次に③と④の検討に移ろう。

主観の行為としての運動(客観の規定としての運動ではなく)★は、従って、空間における多様なものの総合は、我々がこの空間を捨象して、我々がそれによって内的感官をその形式にかなって規定する行為のみに注意するとき、継起という概念をすら初めて産み出すのである。それゆえ悟性は、内的感官においてすでに多様なもののそのような結合を見出しているのでは決してなく、悟性が内的感官を触発することによって、そのような結合を産み出すのである。(B154f.)

★空間における客観の運動は、純粋な学に、従ってまた幾何学に属すべきものではない。(…)しかし、空間の記述としての運動は、外的直観一般における多様なものが生産的構想力によって継起的に総合される一つの純粋作用であり、だから幾何学に属すのみならず、超越論哲学にすら属するものなのである。(B155Anm.)

当該箇所の本文と原註を比較してみると、「客観の規定としての運動」が「空間における客観の運動」と言い換えられ、さらに「主観の行為としての運動」が「空間の記述としての運動」と言い換えられていることがわかる。空間における客観の運動は経験的にしか認識されないから、幾何学の対象ではありえない。それに対して、「空間の記述としての運動」は多様なものが継起的に総合される「純粹作用」である。内的経験は継起的なものが総合され、時間的秩序として結合される空間の記述としての運動を介して初めて可能となる。

### 3. 時間の幾何学的構成

自己触発は主観のア・プリオリな作用であるから、主観の行為としての運動（空間の記述としての運動）とは、「空間における客観の運動」と同一視されてはならない。しかし、ではなぜ「運動」という術語が用いられなければならないのだろうか。カントは諸所で運動を経験的概念として示している。それを踏まえるならば、自己触発を「運動」という術語でもって表現することは過誤のようにも思われる。

自己触発の「運動」的性格を正当に評価するために本稿は、上述の自己触発の名称③と④の言い換えに注目したい。③では、我々が内的感官を規定する、さらに言えば、悟性が感性たる内的感官を規定するという主観の作用が「主観の行為としての運動」と語られている。原註はそれを「空間の記述としての運動」と、何の説明もなしに言い換えているのである。カントがここであえて「空間の記述としての運動」という一見して奇妙な言い換えを実行している理由を検討するための手掛かりが、『自然科学の形而上学的原理』（以下、『原理』）の次の箇所にある。

運動学において私は、物質をそれが運動可能であるという以外のいかなる



性質によっても認識することはなく、従って物質そのものを単なる点として考察することが許されているから、運動をもっぱら空間の記述として考察することができる。(IV 498)

フリードマンが述べているように、『純粹理性批判』原註で問題にされている「運動」は、『原理』運動学章における「運動」と対応する<sup>11)</sup>。運動学における「運動」が「空間の記述」であるのは、運動学が「運動の純粹量論(数学Mathesis)」として、運動そのものを一つの点とみなして、物質の運動を、その点が線を記述する「速度と方向」(IV 480)からのみ考察するからである。運動学においては「点」が一定時間において描く軌跡である直線の「幾何学的な構成」(IV 493)が行われる。

自己触発における「空間の記述」もまた、直線の描写から理解されうる。『純粹理性批判』では、「我々が一本の直線(これが時間の外的に図示的な表象であるべきである)を引きながら、我々が内的感官をそれによって継起的に規定するところの総合の働き」(B154)という叙述がある。自己触発が「構想力の図示的综合」であるのは、内的感官の継起的な規定(時間規定)を直線描写という図示的な仕方です行するためである。カントがこの直線描写を「運動」と明確に名付けている箇所として、次の箇所を挙げる事ができる。

あとで内的変化をすら我々に思考可能たらしめるためには、我々は、内的感官の形式としての時間を図示的に線によって、また内的変化をこの線を引きくこと(運動)によって、従って我々自身が様々な状態において継的に現存していることを外的直観によって、我々に理解しうるようにしなければならないからである。(B292)

この「運動」とは、直線描写を通じて時間を直観可能なものとする作用を意味する。図示的総合あるいは自己触発を通じて直観される時間とは、様々な私の諸状態の継起的秩序に他ならない。この構想力の総合作用は、運動学的な直線描写であり、それゆえに幾何学に属する。言い換えれば、内的感官の継起的規定は幾何学的に認識可能なものとして図示化された時間によって表現されるのである。図示化された時間は、多様なものが一本に結合された直線であり、我々が直観しうるものである。

冒頭の主題に戻るならば、注意において「いつでも内的感官を、悟性が思考する結合にかなって規定して、悟性の総合における多様なものに対応する内的直観たらしめ」ているのでなければならない。

#### 4. 注意と捨象

ここまでの考察で明らかのように、自己触発は自らの表象の継起を幾何学的に秩序付け、直線というモデルで内的な経験を時間として規定することであった。それを踏まえた上で、「注意」について検討してみよう。

「主観の行為としての運動」を説明する上の引用箇所(B154f.)において、「捨象」と「注意」は明確な対比関係にある。ここでは次のように整理されるだろう。

捨象されるもの：空間 ⇔ 注意されるもの：内的感官を規定する行為

とはいえカントは、「内的感官の規定行為に対する注意」のみを自己触発の例に用いているわけではない。「注意という作用においてはいつでも」自己触発が見いだされなければならないと言っているにすぎないのだ。

カントは『人間学』の中で「自らの表象を意識しているよう努力することは、注意(Aufmerken: attention)であるか、私が意識している表象から目を逸らすこ

と(捨象abstractio)である」(VII 131)と述べている。カントは注意と捨象をこのように対比させた上で、『人間学』では捨象に重点を置く。すなわち「ある表象が感官を通じて人間に刻印される場合でさえも、その表象を捨象することができることは、その表象に注意を向けるという能力よりもはるかに高尚な能力である」(ibid.)。

しかし、論理構造から考えて、捨象のこうした優位性は、捨象される対象と注意される対象が同一のものであるときにのみ成立する。当然のことながら、注意と捨象は同一の事態の両側面ですらありうる。カントが論理学講義の教科書として用いていたマイアーの『理性論摘要』<sup>12)</sup>には次のような叙述がある。

認識の不明瞭性が減少させられ、認識の明瞭性もたらされ、あるいは増大させられるような働き(Handlung)は、認識の洗練あるいは発達である。(…)  
洗練のためには、1)明白に認識しようとする事象に注意(Aufmerksamkeit)を向けること、2) (…)他の事象と比較すること、3)あらゆる他の事物を捨象する(abstrahieren)ことという三つの在り方が要求される。(§ 131)

特定の事象に注意することは、言うまでもなく他の事物を捨象することでもある。『ムロンゴヴィウス人間学講義』(1784/85年)では、「私は、他の表象を捨象することがなければ、ある表象に注意することはできない。従って、捨象と注意は常に結びついている」(XXIX 1239)と述べられる。「注意の規則 1)目を向けるべき事象のみに注意する。捨象。(…)」(XVI 325)という「論理学に対する覚書」も、こうした注意と捨象の表裏的性格を示したものとして解釈することができるだろう。このように、注意と捨象が「結びついている」と言われるのは、注意される対象と捨象される対象が相互に排他的な関係にあるとき(Aと $\bar{A}$ )である。

カントは『論理学』の中で、「捨象」を次のような文脈において使用している。

- 1 比較 意識の統一への関係のうちで諸表象を相互に比較すること
- 2 反省 様々な表象が一つの意識のうちで把握されうるのはいかにしてかを反省すること

そして、最後に、

- 3 捨象 そこにおいて所与の諸表象が区別されうるあらゆる他のものを分離すること(Absonderung) (IX 94)

カントは、こうした三つの悟性作用によって概念が産出されると言う。このうち、「比較」及び「捨象」はマイアーの先の叙述を踏まえたものである。ただし、カントにおいては「比較」・「反省」と「捨象」とでは性格が異なる。カントによれば、捨象することは「否定的条件」であり、「比較」や「反省」が「肯定的条件」であるのとは一線を画す(ibid.)。

ここではこうした三つの作用は、概念を産出することによって、単なる「知覚の狂想曲」ではなく体系的な認識を成立させるための悟性の作用として述べられている。ここで捨象とは同時に注意でもある。「他のものを分離すること」は同時に特定の表象に対して注意を向けることだからである。このように、捨象—注意という悟性の作用は、諸表象を分節化する作用である。注意することは、比較を経て諸表象を「結合したり分離したり」(B1)することである<sup>13)</sup>。捨象が比較や反省と異なるのは、捨象においては「普遍妥当的な表象が産出される」(IX 94)からである。捨象された諸表象は「徴表(Merkmal)」である。普遍妥当的な認識が成り立つのは、こうした徴表に基づく表象が行われることによる。「徴表とは、ある事物について、その認識の部分をなすところのものである」(IX 58)。捨象を経て、外的対象についての認識が成り立つのである。

## 5. 注意と思想

自己認識もまた、この捨象作用から説明されうる。その鍵となるのは、「思想」という概念である。

カントは「我々は、思想のうちで(in Gedanken)それを引いてみることなしには、いかなる線をも思考することはできない」(B154)と言う。直線描写は自己自身を触発して時間的に規定する行為であった。これは「思想」において行われるのである。カントは『形而上学の進歩』における自己触発の叙述の中でもこの語を用いている。

我々は内的感官を(…)、注意(Aufmerksamkeit)を介して触発する(というのも、表象能力の実際の(faktisch)規定としての思想はまた、我々の状態の経験的表象にもまた属するからである)」(XX 270)

思想とはこの文脈では何を意味するのか。『純粹理性批判』演繹論では、「私は、私自身を認識するためにも、意識のほか、あるいは私が私を思考する(denken)ということのほか、私における多様なものの直観を必要とする」(B158)というように、自己意識は「私が私を思考する」と表現されている。これは「私は考える」(B131)という根源的統覚の命題を踏まえたものであろう。それに多様なものが加えられて自己認識の容易が整う。カントによれば多様なものによって私は、「思想(Gedanke)を規定する」。類似の表現としては、「我々自身を認識するためには、(…)多様なものを統覚の統一へともたらず思考の行為(Handlung)の他、この多様なものが与えられる一定の様式の直観がさらに必要である」(B157)。このように、「思考」とは自己意識の能動的な作用を、「思想」とは規定される自己意識を意味する。自己触発とは、こうした「思想」の中で直線を描写する「運動」なのだ。

思想における直線描写は、記号的な構成である。運動学が運動する物質の内の性質や延長を捨象して方向と速度に還元したように、直線描写は対象を記号的に秩序づけ、様々な諸性質を一切分離する。私が「思考」することは、多様なものを統覚の統一の下で直線として描写することである。そこでは思考されるもの(直線に組み入れられるもの)は徴表としてみられる。「例えば、私が赤色一般を思考するためには、私はそのことによって(徴表として)何らかのもので見いだされる、あるいは他の諸表象と結合されうる或る性質を捨象する」(B133Anm.)。だから「思想」とは、注意なしでは成り立たない。「無思想(Gedankenlosigkeit)とは、自己自身に対する注意の欠如である」(XV 64)と「人間学への覚書」では述べられる他、「無思想とは、それについて注意も捨象もされない表象の下においてである」(XV 63)とも言われる。このように、注意—捨象によって表象が分節化されていないとき、そこには認識されるべき自己、思想は無い。

注意という作用においては、諸表象の捨象化、徴表化が行われる。それによって主観は「思考」をなすことができる。「あらゆる我々の概念は従って徴表であって、あらゆる思考は、徴表による表象に他ならない」(IX 58)。徴表によって表象されたことは、自己の内では時間という形式の下に定立される。「思想の内で線を引くこと」とは、注意—捨象作用によって普遍化された多様なものを時間のうちに位置付けることである。自己触発とは、時間的秩序という内的経験の条件なのである。自己触発において触発するものは悟性である。徴表化された諸表象の直線化が悟性の自発性なのであり、外的な触発とは「触発」の意味するところが大きく異なっていると言わざるを得ない。

## 結論

このようにみるならば、ケラーのように外的触発を「一次的解釈」、自己触

発を「二次的解釈」と見る方針は不適當であると言えるだろう。捨象—注意によって初めて悟性の自発性を経た外的認識が可能であるが、既にこの注意作用においては「思想」における直線化という「主観の行為としての運動」(自己触発)は起こっているのである。従って自己触発は、外的認識があつて初めて可能なものではない。

確かに外的触発は自己触発に先立つ。しかし、そのまま外的認識にいたるのではなく、外的触発による受容と認識の間には注意—捨象作用が介在している。そして自己触発とはこの注意作用において見いだされる。よつて、自己触発において「注意」されるのはあくまで表象における多様なものであつて、メルニックが述べているように「知覚している私」そのものではない。現象の時間的規定はこの自己触発による直線描写を前提するのである。ただし、注意による徴表化は外的認識の要件でもあり、アリスンのように注意を自己触発の一種と矮小化して解釈することは避けなければならない。

だから、自己触発に外的触発が先立つとはいえ、自己触発が見いだされる注意によって外的経験が可能だという意味で、内的経験は外的経験よりも条件的には先行していると言えるかもしれない。

## 註

- 1) カント研究の文脈において「触発」と言った場合には、「外的触発」を意味することが多い。外的触発についてのまとまつた研究としては、ヘリングの著書が最も知られており、国内では岩田氏の浩瀚な類型学的検討をも挙げるができる(H. Herring, *Das Problem der Affektion bei Kant*, Köln 1953. 岩田淳二『カントの外的触発論』、晃洋書房、2000年)。  
『純粹理性批判』に内在的に自己触発についても検討を加えたものとしては、モアやアリスンの解釈が注目される。そして、自己触発論研究の特徴は、『オプス・ポストゥムム』を視野に収めた論考において、『純粹理性批判』の自己触発論を振り返りつつ論じる、という姿勢の研究が多く見られる点にある。古くは、『オプス・ポストゥムム』研究の実質的開拓者であるアディケスの研究

がそれに該当する(E. Adickes, Kants Opus postumum, Berlin 1920, S. 249ff.)

- 2) なお、『オプス・ポストゥムム』の特にX、XI東では自己触発(のみならず外的触発も)が物理学の可能性の問題とともに扱われており、カントの自己触発論の新たな局面と言えるかもしれない。X、XI東の自己触発論については、アディケスの『オプス・ポストゥムム』に対する全面的な研究が扱った他、近年ではホッペなども自然科学的文脈において触れている(H. Hoppe, Kants Theorie der Physik, Frankfurt a. M. 1969, S. 122ff.)。VII東における自己定立論とのつながりでX、XI東の自己触発論に言及する研究としては、我が国では内田氏の研究が挙げられる(内田浩明『カントの自我論』、京都大学出版会、2005年、181頁以下)。だが、筆者の見る限り、批判期と『オプス・ポストゥムム』とでは、共通する点も多くあり、検討に値するものの、決定的な相違点が多い。例えば、これは内田氏も挙げている(213頁)点だが、構想力に対する言及が『オプス・ポストゥムム』における自己触発の文脈では見当たらないという点、さらに、本稿の主題でもある「注意」については『オプス・ポストゥムム』では一切言及がないという点である。従って本稿では、さしあたって批判期の自己触発論に限定させ、『オプス・ポストゥムム』には深入りしないことにする。
- 3) H. J. Paton, Kant's Metaphysic of Experience, Book II, London, 1936, p. 400.
- 4) P. Keller, Kant and the Demands of Self-Consciousness, Cambridge, 1998, p. 101f.
- 5) A. Melnick, Kant's Theory of the Self, New York & London, 2009, p. 112ff.
- 6) H. E. Allison, Kant's Transcendental Idealism(Revised and Enlarged Editon, New Heaven & London, p.284.
- 7) H. E. Allison, *ibid.*, p. 285.
- 8) また、自己触発が外的経験の条件でもあるとすれば、自己触発が主題的に語られない『純粹理性批判』第一版と、自己触発についての言及がある第二版とでは経験の可能性について大きく異なる議論が展開されていることになる。アリスンはそれについて詳しい説明をしていないが、いずれにせよ、そのように論じるためにはさらに立ち入った議論が必要とされることになるだろう。
- 9) 図示的総合の概念については、『就職論文』にも目を配りながら時間概念の二側面性を指摘するロンゲネスの研究(B. Longuenesse, Kant and the Capacity to Judge, Princeton & Oxford, 1998, p. 211ff.)の他、渡邊浩一氏の概念史的研究(渡邊浩一『『純粹理性批判』の方法と原理』、京都大学学術出版会、2012年、183頁以下)が重要な先行研究として挙げられる。ロンゲネスや渡邊氏はともに、自己触発も踏まえた叙述の仕方をしているが、自己触発論そのものに主題的検討を加えているわけではない。
- 10) 本稿では、自己触発と関わる限りでの”Handlung”という語を「行為」と訳す。それは、直線を描写する行為であるという点を強調するためである。
- 11) M. Friedmann, Kant and the Exact Sciences, Cambridge, 1992, p. 333.



- 12) G. F. Meier, Auszug aus der Vernunftlehre, Halle 1752.
- 13) 『論理学』における「比較」が、『純粹理性批判』第二版序論冒頭のこの箇所で述べられる「比較」と同じものであると解釈しているのが、ロンゲネスである(B. Longuenesse, *ibid.*, p. 114.)。